

## 共にあること

(原文)

岡村 環 (16 歳)

京都府

立命館高等学校

優しさとは、誰かの困っている状態を代わりに解決してあげることではない、と私達は知っています。私は祖父が去年亡くなってから生きる意欲をなくした祖母に関わって、その思いをより強くしました。

祖母は八十六歳ですが、結婚後も仕事を続け、心身ともに自立した人でした。それなのに祖父の死後、毎日どんよりして延々愚痴をこぼす姿には驚くばかりでした。食事を運んだり、遺品の片付けをしたり、身の回りの面倒を取り除き、また映画や旅行へ連れ出し気たり、趣味サークルを探したりしましたが、元気を出して貰えるどころか拒絶されることもあったからです。いわゆる優しさが一つも通用しなかったのです。

祖父の介護中は「自由になったらあれもこれもしたい」と希望や計画を話していた祖母なのに、なぜそんなに無気力になってしまったのか。思うに、祖母は介護をすることで、不自由を感じながらも実は生きる力を得ていて、今は生活の張りが無いのでしょうか。人は自分の楽しみの為にだけ時間や労力を使うのでは、本当の満足は得られない生き物なのかもしれません。であれば、祖母の中に眠る、自分が必要とされている実感を得たい、という気持ちを満たすことが祖母への優しさではないかと思いました。

高齢者である祖母が、庇護を受けるばかりの立場ではない、ということを明らかにするにはいろいろなアプローチが必要です。まず、ご近所で同じように近年配偶者を亡くされたばかりの女友達との定例のお茶会を催すことにしました。そして皆さんに、現況や今の思いを口にして分かち合ってもらいました。これは独り身になっても似たような仲間がいると感じてもらおうためのステップです。

回数を経て場がなごんだところで、次に聞き取りをしてみました。内容は、日本では高齢でも主に女性が介護を担っている実情、そして突然独り身になってどう思うか等です。高齢者が高齢者を看取るという大変な思いをされ、その経験を生かさないのは勿体ないと思ったのです。

例えば、夫の介護時には福祉の関係者が体調や精神面について配慮し、夫本人や妻も「気にかけて貰っている」という実感を得ることが出来ます。でも夫が亡くなった途端、妻の体調どころか、生きていくかの確認さえ行政からはありません。親族が身近にいないと、孤独な生活がいきなり始まるのです。しかもこのことは社会的に認知されていません。私がおのづから要約すると、皆さんに自分達の経験

は人に伝える価値があると実感して貰えました。

それからは、この経験を記すブログ作りの説明です。元々SNSなどの交流手段は、体が思うようにならない方達にこそ役立つツールだと考えていたので、祖母のブログは数年前に開設してありました。その時は興味を示してくれませんでした。祖母の庭のえんどう豆が実った写真や、シニアスイミングで新しい運動を始めた話題等、いつか見返した時に心がなごむよう作り溜めていました。今回見せてみると、自分の人生を振り返れると喜んだだけでなく、記事が知らない人に数千回も見て貰えていることや、コメントまであることに驚いていました。他の皆さんも、「返事のある壁新聞みたい」と興味津々になってくれました。そして思い出の記録だけでなく、「看取りの後の老人の現状を知ってもらおう」と、積極的に発信するアイデアが出始めました。どの顔も生き生きしています。

人は年齢や性別や環境で隔てられているようで、本当は少し立場が違うだけであり、優しくするもされるありません。全てのことに「共にいるよ」と関わっていくことが大事なのでしょう。私はそれにもっと気づいて貰えるように、祖母とご近所のブログを作ることを今後精力的に進めたく思います。ネットの接続環境など課題はありますが、それを一緒にあれこれ考えるのも面白く、まさに「共にいるよ」という感覚を得られ、私にとって新しい優しさの定義となったからです。